

コンポストとは？

コンポストとは、家庭から出た生ごみを土と混ぜて入れることによって、土の中の微生物等の働きにより、たい肥に変えるお手伝いをするための容器のことです。

コンポストの使い方 コンポストで「たい肥」ができるしくみ

コンポストに入れた生ごみが「たい肥」に変化するのには、土の中にいる微生物等の「発酵・分解」の働きによるものです。

容器のしかけや、薬剤によるものではありません。

コンポストに入れた生ごみの水分は地中にしみこみ、残った有機物の部分は土の中の微生物等の働きで「発酵・分解」され、数ヶ月程度で「たい肥」になっていきます。

コンポストで処理すれば、「生ごみをごみとして出さない」生活になり、ごみ減量につながります。

また、良質なたい肥をつかって有効に活用することで、生ごみを土に還すという資源循環になります。



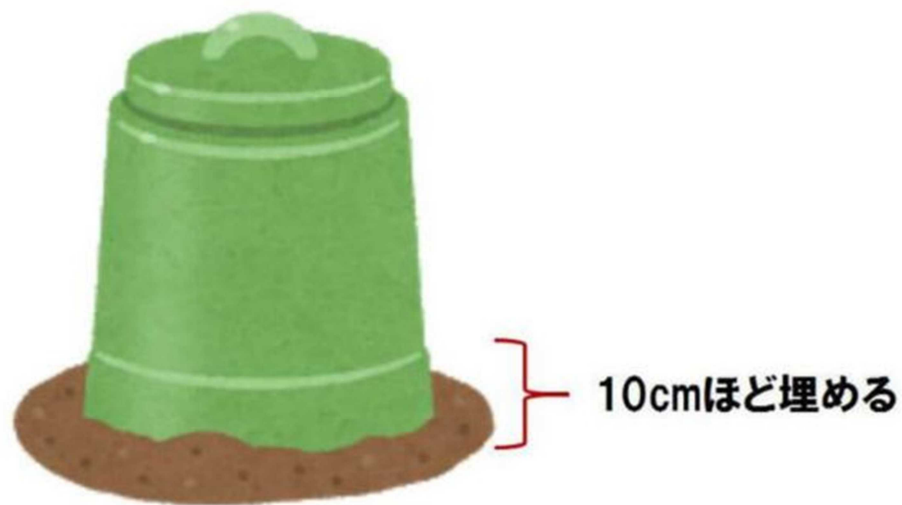
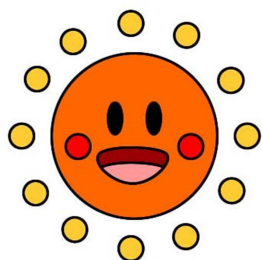
コンポスト容器(地上設置型の例)

目次

- 1)コンポストの設置について
- 2)上質なたい肥の作り方
- 3)こんなことが起きる前に
- 4)万が一虫がわいたら
- 5)できたたい肥の状態 ～ たい肥の上手な使い方

1.コンポスの設置について

1. 樹木の直下に設置するのではなく、50～80 センチメートルほど離して設置してください。
2. **なるべく日当たりが良く、排水や風通しの良いところ**を選んでください。
3. なるべく深め(30～40 センチメートル)に穴を掘り、**10～20 センチメートルの深さにコンポストを設置**してください。
(土との接地面が多くなり分解しやすくなるため。また、風などで動いたり倒れたりすることを防ぎます)
4. 臭いや虫等で迷惑をかけ、トラブルの原因になる場合があります。設置には近隣住宅に配慮した場所を選んでください。



設置場所が水はけの悪い土地の場合は、水はけを良くするために穴を掘らず、コンポストと地面の間にレンガ等を敷き、地面との間を空ける設置方法もあります。

こうすることで水はけを良くし、空気が容器内に入りやすい状況をつくれます。状況に応じた設置方法を選んでください。

2. 上質なたい肥の作り方

1. コンポストに入れる物について

コンポストは、土中の微生物の力で生ごみを分解するものです。**生ごみや人が食べられるものなどは投入することができますが、分解しない金属・ガラス・プラスチック等は投入することができません。**

2. 新鮮な生ごみを

腐っている、または腐りかけている生ごみを入れてしまうと、コンポストの中で微生物が分解する前に腐敗し、臭いや虫がわく原因となります。**新鮮な生ごみを入れる**ようにしましょう。

3. 水分調整に気をつけて

生ごみの水切りをせずにコンポストの中に入れてしまうと生ごみが腐敗してしまい、臭いや虫がわく恐れがあります。

生ごみのおよそ 80% は水分であるといわれ、たい肥化がよく進む水分条件はおよそ 60% といわれています。

コンポストに投入する前に生ごみを一度絞ってください。

絞ることで水分を減らすことができます。



4. 切りかえし(かくはん作業)

コンポストは好気性菌(空気を好む菌)によって生ごみを分解するので、**容器の中になるべく空気を入れてあげることが重要です。**頻繁にする必要はありませんが、切りかえしをすることによりたい肥化速度が早まり、失敗を減らすことができます。

3.こんなことが起きる前に

悪臭

土を多めにかぶせることや、発酵促進剤を加えることで悪臭を抑える効果があります。

虫の発生対策

まずはコンポストに集まる虫の代表2つについて知りましょう。

・コバエ

コバエは2~4mmほどの小さなハエで、ショウジョウバエなど数種類をまとめてコバエと呼びます。

腐った果物や野菜などの匂いにひきつけられ、進入を許してしまったら最後、卵を産んでしまいます。

台所の三角コーナーなどにためておいた生ごみは、すでに産卵されている、なんてこともあります。

卵は成長が早く、産卵から10日ほどで成虫になるといわれているため、どんどん増えていきます。

生ごみが入ったコンポストは、匂いや熱などコバエの大好きなものがいっぱいなため、大量発生してしまう可能性があるのです。

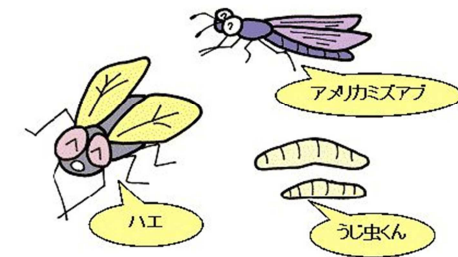
・うじ虫

うじ虫とは、ハエの幼虫のことをいいます。

ハエは1回の産卵で50~150個もの卵を産み、半日ほどで孵化してうじ虫となります。

ハエが1匹でも入っていたら、うじ虫だらけになってしまってもおかしくないというコトです。

コンポストにあつまる虫



★コンポストの虫対策として気をつけることは

ハエを侵入させない

そもそもハエが入らないようにすればいいのですが、ハエはちょっとした隙間から進入してきます。

蓋を開けて生ごみや落ち葉を入れなくてはならないので、ハエの侵入を抑えるために、蓋の裏に防虫剤を貼っておく方法や、目の細かいネットで覆ってしまう方法があります。

生ごみの入れ方に気をつける

①一度に大量の生ごみを入れない

一度に大量の生ごみを入れてしまうと、分解に時間がかかり、虫の発生原因となってしまいます。

キッチンの三角コーナーなどに生ごみをためている間にも、虫の卵を植えつけられてしまう可能性があるため、生ごみが出たらこまめにコンポストに入れることが大切です。

②生ごみは細かくきざんで入れる

生ごみが大きいとそれだけ分解するのに時間がかかり、腐っていきます。腐った匂いは、ハエなどの害虫が集まってしまいうため腐らないようにすることが大切です。できるだけ細かくして早く分解されるようにしてから、コンポストへ投入しましょう。

③水分を切ってから入れる

水分はうじ虫の大好物。できるだけ水分が少ない状態にするのが理想的です。

④生ごみを入れたら土を被せる

生ごみを入れたら、土で完全に覆ってしまうと効果的です。表面部分に生ごみが出ないように、土で被せてしまいましょう。

⑤石灰を混ぜる

生ごみは酸性なので、石灰を少し入れて弱アルカリ性になると、微生物が元気になり活発に分解してくれます。しかし、入れすぎてしまうと微生物も死んでしまうので加減が難しいところです。なのでこの方法は参考としてください。

★コンポストの土中からの小動物対策として気をつけることは

土中からモグラなどの小動物が容器の中を荒らすことがまれにあります。

そのため、容器を埋める時に、容器の底にネットや網を張る、石を敷き詰めるなどの対策をすることにより小動物を防ぐことができます。

(石を敷くことで水はけを良くする効果もあります。ただし、土に生ごみが接していないと微生物が生ごみを分解できませんので、石の敷き詰めすぎには注意しましょう。)

4.万が一虫がわいたら

万が一、虫がわいてしまったらどうしたらいいのでしょうか？

うじ虫が大量発生しても、そのまま放置しておけば自然といなくなるそうです。耐えられる人は、自然に任せてみる手もありますが…。

殺虫剤をバーっとかけたらどうかと考えますが、殺虫剤をかけてしまうのは、たい肥作りとしてあまりよくありません。

殺虫剤をかけてしまうと、嫌な害虫はいなくなります。ただし、たい肥中に殺虫剤の成分が残ってしまうという結果にもなります。

後々、たい肥として畑に撒くことを考えると、できるだけ薬剤に頼らない自然な方法が理想です。

★対応策の一例

・たい肥化を進める

たい肥化を促進させるということは、分解・発酵をはやく進めるということです。

発酵してくると熱が発生するので、コンポスト内の温度が60℃以上になり、この熱でハエやうじ虫が死んでしまうといわれています。

微生物は元気に活動してくれるようになるので、早くたい肥もできていいことづくめとなります。

たい肥化を進めるには、発酵促進剤・糠・ピートモスなどを混ぜるといいでしょう。

・木酢液を散布

木酢液とは、炭を作るときに出てくる煙から抽出した液体です。

木酢液に含まれる成分(酢酸・アルコール)には殺菌・消臭効果があり、木酢酸の香りを苦手とする虫も多いため、ガーデニングでは害虫避けによく用いられます。

また、土壌にまくと微生物の活動が活発になるともいわれていて、土壌改良にも用いられることもあるので、コンポストの害虫駆除に向いています。

木酢液は原液の場合、500倍に薄めて霧吹きで散布します。そのまま使える便利な木酢酸も販売されています。

・熱湯

害虫が大量に発生してしまった場合は、熱湯をかけるなどして駆除する方法もあります。

5.できたたい肥の状態

たい肥化を続け、容器が一杯になってから約半年後くらいには、黒っぽくさらさらした土のようなたい肥ができ上がります。熟成させている間もただ放置しておくのではなく、時々まんべんなく切り返しをすることにより、上部と下部の差がない上質なたい肥になり、また熟成時間短縮にもつながります。

たい肥ができ上がったら容器を引き抜き、また違う場所へ設置し直してください。(同じ場所でも良い)

引き抜くことが大変な場合には、柄の長いひしゃくのようなものを使ってたい肥を取り出しましょう。

コンポストが2基あると設置のし直しをしなくて済む上、1つを熟成させている間に、もう1つで生ごみの処理を継続してすることができるととても便利です。

たい肥の上手な使い方

できたたい肥を直接植物の根の直下に埋めると、かえって根腐れ等、悪影響を及ぼすことがあります。

土に埋める場合は根の直下ではなく、少し離し植物の周辺に埋めてください。

畑に利用する場合は、畝と畝の間に溝を掘り、そこにたい肥を混ぜ、覆土してください。

プランターで利用する場合は、土とたい肥を1対4ぐらいの割合で混ぜ合わせてから使用してください。

生ごみが完全にたい肥化しているか心配な場合には、1ヶ月ほど土と混ぜ合わせ馴染ませてから、種等を蒔くようにしてください。

6.最後に

上質なたい肥づくりには、手間を惜しまないということが大切です。

コンポストの使い方や害虫対策は例です。必ずしもこのようにしなければいけないということではありません。

使い方については、各自でパンフレットや説明書で確認するほか、販売店で詳しい方から情報を得るのもいいでしょう。